お菓子の大舞踏会

夢野久作

五郎君はお菓子が好きでしようがありませんでした。御飯も何もたべずにお菓子ばかりたべているので、お父様やお母様は大層心配をして、どうかしてお菓子を食べさせぬようにしたいというので、ある日、家中(うち)にお菓子を一つも無いようにして、砂糖までもどこかへ隠して、いくら五郎さんが泣いてもお菓子を遣らない事にしました。

五郎さんは死ぬ程泣いてお菓子を欲しがりましたが、お父様もお母様も只お叱りになるばかり……とうとう五郎さんはすっかり怒って、御飯もたべずに寝てしまいました。

翌る日、学校はお休みでしたが、五郎さんは矢張り怒って、朝御飯になっても起きずに寝ておりました。お父様もお母様も懲しめのためにわざと御飯を片づけてしまって、お父様はどこかへ御用足しにお出かけになり、お母さんも一寸買物にお出かけになりました。

あとにたった一人、五郎さんは、

「ああお腹が空いた。お菓子が欲しいなあ」

と思いながら、涙をこぼしてジッと寝ておりました。

すると玄関の方で、

「郵便……」

と大きな声がして、何かドタリと投げ出される音が

しました。五郎さんは思わず大きな声で、

「ハイ」

と言って飛び起きて駈け出しますと、それは四角い油紙で、何だかお菓子箱のようです。しかもその表には「五郎殿へ」と書いて、裏には兄さん夫婦の名前が書いてありました。

五郎さんは夢中になって硯箱の抽出から印を出して、郵便屋さんに押してもらって、小包を受け取りました。鼻を当て嗅いでみると、中から甘い甘いにおいがしました。

五郎さんはもう夢中になって、鋏を持って来て小包

を切り開いて見ると、それは思った通りお菓子で、しかも西洋のでした。……ドロップ、ミンツ、キャラメル、チョコレート、ウエファース、ワッフル、ドーナツ、スポンジ、ローリング、ボンボン、そのほかいろいろ、ある事ある事……。

それから食べたにもたべたにも、一箱ペロリと食べてしまった五郎さんは、空箱と包み紙や紐を裏の掃きだめに棄てに行って、帰りがけに台所へ行ってお茶をガブガブ飲むと、そのまま何喰わぬ顔で蒲団にもぐり込んでしまいました。

「アラ、五郎さんはまだ寝ているよ。何て強情な児で

しょう。よしよし、今にきっとお腹が空いておきて来るだろうから」

とお母様は独り言を云って、台所の方へお出でになりました。五郎さんは可笑(おか)しくて堪らず、蒲団の中でクスクス笑いましたが、そのうちにうとうと睡ってしまいました。

するとやがて何だか恐ろしく苦しくなって来ましたので、どうしたのかと眼を開いて見ますと、いつ日が暮れたのか、あたりは真暗になっていて何も見えません。その中(うち)に最前喰べたお菓子連中が、めいめい赤や青や紫や黄色や又は金銀の着物を着て、男や女の役者

姿になって大勢居並(いなら)んでいるのがはっきりと見えました。

「こんなに大勢、一時にお菓子たちがお腹(なか)の中で揃った事は無いわねえ」

とお嬢さん姿のキャラメルが云いました。

「そうだ、そうだ。それに五郎さんの胃袋は大変に大きいから愉快だ」

と道化役者のドロップが云いました。黒ん坊のチョコレートは立ち上って、

「一つお祝いにダンスをやろうではないか」

と云うと、ウエファース嬢が、

「それがいい、それがいい」

「万歳万歳、賛成賛成」

と皆が総立ちになって手を挙げました。すると忽（たちま）ち五郎さんのお腹がキリキリと痛くなりましたので、思わず、

「苦しい苦しい」

と叫びました。

「あれ、苦しいと言っててよ」

とドロップ嬢が心配そうに云いますと、兎の姿をしたワッフルが笑って、

「アハハハハ、自分が悪いのだから仕方がない。まあ

暫く辛抱してもらうさ。さあさあ、踊ったり踊ったり」

と云ううちに、もう踊り初めました。

ボンボンが太鼓をたたく。ローリングがピアノを弾く。ウエファース嬢が歌い出す。それにつれて五色の着物を着た小人のミンツ達を先に立てて、キャラメル嬢をまん中にワッフルの兎、ドロップの道化役者、チョコレートの黒ん坊、ドーナツの大男、そのほかいろいろのお菓子達が行列を立てて行くあとから、スポンジ嬢が手鼓(てつづみ)をたたきながらついて行きます。

こうして沢山のお菓子たちがみんな一所に輪を作ると、一二三というかけ声ともろ共に一時に踊り出しま

した。
「プーカプーカ、チョコレート
プーカプーカ、ローリング
ミンツ、ワッフル、キャラメル、ウエファース
ドーナツ、スポンジ、ボンボンボン

太鼓の響はボンボンボン
ピアノのひびきがローリング
ウエファースと歌い出す
ドロップドロップ踊り出す
ワッフルワッフルはやし立て

キャラメルキャラメル笑い出す
足どりおかしくチョコレート
スポンジスポンジ飛び上る
そこで五郎さんのポンポンが
ミンツミンツ痛み出す」
五郎さんはもう死ぬ位苦しくなって、
「苦しい苦しい、堪忍(かんにん)して頂戴。助けて助けて、お父様！　お母様」
と叫びました。
「まあ、どうしたの五郎さん。大層うなされて」
とお母さんにゆり起されて、五郎さんはフッと眼を

開くと、まだおひる過ぎでうちの中はあかるいのでした。

「お母さん、僕のお腹の中でお菓子が踊っている。ああ、苦しい苦しい。堪忍して頂戴、もう決してお菓子を食べませんから。アー、イタイ、イタイ。お母さん、助けて助けて」

と、五郎さんは汗をビッショリ掻いて、のた打ちまわりました。

お母様は驚いて、お医者を呼びにお出でになりましたが、いろいろわけを尋ねて、やっとお菓子の喰べすぎだという事がわかりますと、お医者はこわい顔をし

て、

「これから決してお菓子を喰べてはいけませんよ」

と云って、苦い苦いお薬を置いておいでになりました。

それから五郎さんは、病気が治ってからも決してお菓子を欲しがりませんでした。

底本：「夢野久作全集1」ちくま文庫、筑摩書房
　１９９２（平成４）年5月22日第1刷発行
※底本の解題によれば、初出時の署名は「海若藍平（かいじゃくらんぺい）」です。
入力：柴田卓治
校正：もりみつじゅんじ
２０００年３月６日公開
２００６年５月３日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。